



メキシコ歴史文化講演会 第1回報告

「メキシコ・日本：外交関係の130年」

駐日メキシコ大使 カルロス・アルマーダ閣下

メキシコと日本の外交関係は今から130年前の1888年、日墨修好通商航海条約の締結とともに始まりました。当時のメキシコ側の意図の一つとしては、西洋諸国として初めて日本政府と平等条約を結ぶ国家となることがあり、また、同条約はメキシコがアジアの国と結んだ最初の条約でもあります。この記念すべき条約は、相互尊重と相互協力を基本概念としており、その精神は今日まで我々の両国関係に引き継がれています。本稿は同条約締結の経緯を詳述するとともに、日墨関係の歩みとその成果について述べるものであります。



1869年 明治政府：不平等条約改正を列強に要請

1868年1月3日に王政復古の大号令が発せられ、明治天皇の超越的権威のもと、朝廷に統治権が返上されました。また外交面においても、国家を代表し権限を行使することになりました。

明治天皇が代表する新政府は、前政権（注：徳川幕府）が結んでいた16もの不平等条約という課題を抱えており、それは国内財政はもちろんのこと国際社会における日本の立場にも大いに影響していました。例えば、在日外国人は治外法権やその他特権を享受している一方で、日本政府は関税自主権を行使することができませんでした。結果として、日本政府は国際社会の一員として十分に認められていたとは言えない状況にありました。1869年、日本政府は当時の列強諸国に対し不平等条約の見直しを求めましたが、これは無視される形となりました。しなかしながら、時同じくして日本は制度的、立法的そして技術的な近代化を進めていったのです。

1874年 メキシコ金星日面観測隊が横浜到着

19世紀後半のメキシコもまた、似通った状況にありました。他国からの干渉や内戦などの混乱が数十年続いた直後の時期であり、また、列強に名を連ねることを目指し制度的近代化そして殖産興業を推し進めていたのです。当時のメキシコ政府はまた、自国の文化、科学そして芸術を普及することに関心をもっていました。こうした経緯があり、1874年の秋、勸業省官房長でありメキシコ天文学協会会長であったフランシスコ・ディアス・コバルピアスがアジアへと派遣されました。彼はメキシコ天体観測団を指揮し、「金星の太陽面通過」の観測をするという使命を帯びていたのです。この「金星の太陽面通過」は当時、天文学上非常に重要な現象とされていました。なぜならこの観測により、地球と太陽を隔てる距離を正確に計測し、そこから太陽系の規模と機能を知ることができると考えられたからです。

この科学的偉業は、ある一国の努力だけで十分な結果が得られるものではありませんでした。様々な国の科学者たちが観測結果を共有し比較研究するなど、多国間での協力が必要だったのです。こうした国際的な学術的場面は通常、先進諸国のみが参加するものであり、ひいてはそうした機会への参画がどれほど意義深いことであったかは想像に難くないでしょう。そのため、メキシコは観測隊派遣により、自国の科学発展そして近代的国家としての姿を国際社会に提示しようとしたのです。

もともと、このメキシコによる金星の日面観測は当時の中国で実施されることになっていました。そのためディアス・コバルピアスと隊員たちは、時の権力者の清の皇族・愛新覚羅 奕訢(あいしんかくら えききん)

目次

- | | | | |
|--------------|---|-----------------------|------|
| 1. 第1回講演会報告 | ：「メキシコ・日本：外交関係の130年」 | 駐日メキシコ大使 カルロス・アルマーダ閣下 | ...1 |
| 2. メキシコ報告 | ：「35番目の世界遺産テワカン・クイカトラン溪谷」 | メキシコ観光(メキシコ) 出納孝介 | ...5 |
| 3. メキシコ料理と歩む | ：「食の世界遺産 メキシコ料理へのアプローチ 2」 | ラ・カシータ オーナシェフ 渡邊庸生 | ...6 |
| 4. お知らせ | ：幹事会の人事異動...7 / メキシコ歴史文化講演会「日墨修好130周年」...7 / あとがき...7 | | |

に宛てた信任状をたずさえていました。しかしながら、日本政府から取り計らう旨の打診があり、目的地を変更するに至りました。そのため、観測隊は進路を日本へ変え、1874年11月8日に横浜港へと到着したのです。こうした経緯のため、観測隊は日本に宛てた信任状を用意していなかったにも拘わらず、日本側はすぐに観測場所の提供等、さまざまな便宜を図りました。メキシコ観測隊は日本側の対応を受け入れ、神奈川県自治体からの許可のもと、当時「ブラフ」と呼ばれていた横浜山手と野毛山の二カ所に観測基地を定めました。そして1874年の11月20日には、前述の基地にメキシコ国旗を日本国内で初めて掲揚したのです。

コバルビアス一行は、日本海軍からの要請により、3名の日本の若者を実習生として受け入れることになりました。そのうち2名は、ヨシダ氏とヤマサキ氏という名の士官であり、もう1名はタカノセ氏という海軍学校の学生でした。当時、天文学研究においてはメキシコのほうが先進国であったため、日本政府は実習生を派遣し、天体観測の技術を習得させる目的があったのです。コバルビアスは、手記のなかで、この3名の実習生たちの勤務態度や規律について多くを記しています。その文脈においてコバルビアスは、日本人移民を本国に受け入れることのメリットを強調し、その旨を力説しています。

メキシコ観測隊の日本滞在中、文部大輔であった田中不二麿が歓迎会を行い、メキシコ科学者たちの業績を称え、そして3名の日本人実習生を受け入れに改めて感謝の意を表しました。そして、「メキシコは日本へ、武器や武力ではなく、科学を通じた連帯を携えてきてくださいました」との言葉を述べたのです。同じくコバルビアスは、外務卿の寺島宗則と会談する機会を得ました。そこで寺島は、メキシコと日本が外交関係を未だ結んでいないことは残念であると述べ、それにコバルビアスは、両国の外交樹立ならびにそのメリットについて必ずや本国に提言すると返答しました。

観測隊長コバルビアス著『日本旅行記』の貢献

1875年2月1日、5ヶ月にわたる観測と研究を終え、メキシコ観測隊は横浜港を後にしました。

観測結果をまとめたコバルビアスの報告書は、金星の太陽面通過についての学術的報告のみにとどまらず、日本について見聞した興味深い印象やコメントを記しています。そこではまた、外交面・通商面での対日関係の強化の重要性を雄弁に述べています。同じく、同報告書のなかでは、列強諸国が日本に課していた諸々の公平とはいえない関係を目の当たりにし、列強の姿勢を批判するコメントも残しています。また先述のように、メキシコへの日本移民団の受け入れについても提言をしています。

『ディアス・コバルビアス日本旅行記』と題されたこの報告書は、時の大統領セバスティアン・レルド・デ・テハーダに献上されました。当時の日本について価値ある見聞や観察をもとに、メキシコ政府は日本との関係やその将来性について検討していくこととなりました。注目すべきは、その当初から、両国の間には調和と対等な相互関心が認められていた点です。

両国の国交樹立交渉の進み出しは順調なものでありました。理由の大部分は、メキシコの日本に対する共感に依っていますが、それだけでなく、外交官たちの卓越した手腕と尽力も不可欠な要素でした。メキシコ側の登場人物としては、時の駐米全権公使であったマティアス・ロメロ、外相のイグナシオ・マリスカル、そしてマヌエル・ゴンサレス、ポルフィリオ・ディアス両大統領が挙げられます。どの人物も、長期的な視野に立って行動し、実践的な思考と忍耐を有していました。完全なる国家主権回復をめざそうとする当時の日本政府の姿勢は、メキシコ政府にとって容易に理解できるものでありました。同時に、スペイン副王領時代に存在していたアジア・ヨーロッパ間の貿易を復活させるべく、メキシコ側が様々な取り組みを行っている時期とも符合していたのです。

1882年 友好再開に向け最初の条約交渉と中断

条約締結交渉に際して、最初にイニシアティブをとったのはメキシコ側であり、日本に歩み寄り提案をもちかけたのもメキシコでした。1882年9月21日、マティアス・ロメロが、時の駐ワシントン臨時代理公使の高平小五郎と外交関係樹立について会談の場をもち、高平はその旨を本国に報告しています。

その約2ヵ月後の11月30日には、当時の外相 井上馨がメキシコからの提案を了承するとし、「日本とメキシコ両国の長い友好の歴史を、通商を通じ再開することは誠に理にかなっていることである」と、前向きな意向を表明しました。言及すべき重要なことは、「締結／樹立」という用語の代わりに「再開」という言葉を使っていることであり、これは中国をはじめとした東洋諸国の外交政策や姿勢がよく反映された言葉選びと言えるでしょう。

しかしながら、こうした前向きな初動にも関わらず、翌年はじめの1883年1月9日に、日本政府は前述の提案を却下する旨を返答しました。その理由としては、領事裁判権や、関税に関して5%以上課税できない等の著しく不利な項目を含む不平等条約の存在があります。すなわち、同条約群に盛り込まれていた最恵国待遇条項のために、メキシコと結ぶ新条約の内容がその他の列強各国にも適応されてしまうことを危惧し、このような判断に至ったのです。

1887年 メキシコと日本が平等条約交渉を再開

この日本の決断に対するメキシコ側の返答は非の打ち所のないものでした。「メキシコは、完全なる平等条約の締結を約束するとともに、日本がその準備を整えるまで待つ。この新条約の締結は、列強国との不平等

条約を破棄する上で先駆的役割を果たすでしょう」という旨を返答したのです。日本政府は、不平等条約改正にしばらく精力を傾けることとなり、メキシコとの新条約締結の交渉を再開させたのはそれから4年後のことでした。具体的な交渉再開は、1887年11月19日、新外相伊藤博文の指揮のもと始められました。前述の経緯からすると意外なことに、「交渉の基盤は、だいたいにおいて最恵国の意義に関する」ものでありました。メキシコはこの提案を受け入れましたが、この直後に、まさに西洋諸国との不平等条約改定交渉が難航しているかど等で日本側で内閣改造がおこり、その結果としてメキシコとの交渉は再び延期となったのです。

その後、大隈重信が新しく外務大臣に就任し、前政権からの未解決課題であった不平等条約改定問題について交渉を続けていきました。大隈が掲げた交渉姿勢のなかで特出しているものは、現行条約では特に在日外国人にとっては得られる特権よりも不便さのほうが多いことを列強国に痛感させた点、そして交渉のプロセスは、国際会議形式ではなく個別交渉をベースに行うという点、そして、列強との交渉材料として有益な先例をつくるという点でした。そして、この先例となりうるのは日本と平等条約を結ぶことに一度合意していた国つまりメキシコであったのです。そこで大隈は、その当時の駐ワシントン公使であった陸奥宗光に対し、メキシコと新条約締結の再交渉をはじめよう指示したのです。

最恵国待遇と裁判権—秘密条項で予防

交渉において、最恵国待遇条項は日本が最も懸念していた点でした。なぜなら、この条項に従うと、新条約や他締結国より有利な条約改定結果が、旧条約締結国や新規の締結国にも適応されることになるためです。そこで、大隈はメキシコに対し、最恵国待遇の条件付き適応を提案しました。具体的には、メキシコが日本の裁判管轄に従うことを条件に在日メキシコ人に対しに内地開放を認めるというものでした。これは新条約締結の交渉においてキーポイントとなりました。なぜならば、当時、在留外国人に日本の裁判権が適応されなかったため、彼らの居住は、限られたいくつかの開港場付近に設置された外国人居留地のみに定められており、また、特別な許可なしには在留外国人たちは日本国内で商業を行ったり旅行をすることができず、これに列強各国はかつてから難色を示していたからです。もしメキシコが日本の提案を受けいければ、列強との交渉において先駆として重要な役割を果たすであろうことは明らかであったのです。

マティアス・ロメロは、この大隈からの提案を早速本国に報告しました。それを受けた当時の大統領ポルフィリオ・ディアスは、特に国内居留外国人に対する裁判権に関してメキシコ側がイニシアティブをとってその正当性を認めた場合、他の条約締結国である列強諸国の利害に影響し不興を招きかねないとの懸念を示しました。そこで、ロメロは、この平等条約の締結内容に関してアメリカ国務省に照会しますが、これに対し同国は異を唱えるところはないと回答しています。

上述の項目は新条約の第4項で言及されることとなりますが、日本側でも大きな争点の一つとなりました。なぜなら上記の場合、在留メキシコ人は日本領域内の入来、滞在居住そして職業選択の自由を享受する当時唯一の在留外国人となることを意味し、その他の欧米諸国が同様の権利を主張してくるのではないかと危惧したためです。こうした事態を防ぐために、日本政府はメキシコ側に秘密条項を特別に設けることを提案しました。その内容は、他条約締結国がメキシコが享受する特権を求めたきた場合には、この第4条を分離して破棄する権利を保留するというものでした。

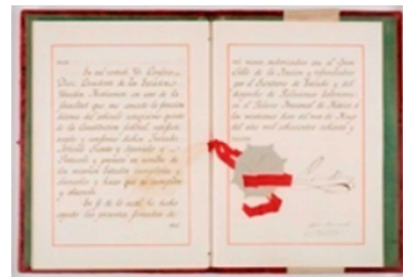
メキシコは、この秘密条項は日本政府側の予防措置の一つであると理解し、いずれにしても自国民の日本国内における安全や人権が侵害されることないと判断しました。メキシコ政府にとっては、日本との通商関係そしてアジア諸国との関係強化においても、同条約の締結は重要事項の一つであったのです。

1888年11月 日本初の平等条約を締結

上記のような紆余曲折を経てついに、1888年11月30日、メキシコと日本両国の駐ワシントン公使であったマティアス・ロメロと陸奥宗光によって、日墨友好通商航海条約締結の署名が完了したのです。

この交渉の間、メキシコは常に卓越したリーダーシップと相互尊重という理念を掲げ行動していました。こうした経緯のもと、1892年4月19日には、明治天皇が時の大統領ポルフィリオ・ディアスに大勲位菊花大綬章を叙勲しました。

日墨友好通商航海条約批准書→



こうした経緯の延長線として、1898年、当時の駐日弁理公使であったマウリシオ・ウォルハイム在任時に、現在まで在日メキシコ大使館が位置する永田町の土地の賃貸借契約が結ばれました。日本の政治の中心地である永田町エリアに大使館を構えるということは例外的なことでもあります。これは、平等条約締結が、列強諸国との不平等条約改定にあたり模範的先駆として非常に有利に働いたという点をいかに日本政府が重要視していたかの証左とも言えるでしょう。

国交130年間のスケッチ

1888年から今日まで、両国の外交関係は、相互主義的そして戦略的理念のもと広範囲の分野においてます

ます深化し強化されています。その一例として、両国関係において重要な出来事をいつか下記に言及します。

□マデロ大統領夫人を庇護した堀口九萬一代理公使：メキシコと日本の国家間のつながりは、両国人の人道的な絆にまで広がっています。例えば、1909年から1913年まで在メキシコ日本公使館で臨時代理公使として着任していた堀口九萬一（彼は詩人そしてフランス文学者・堀口大學の父としても知られています）のエピソードはその白眉とも言えるでしょう。彼の任期終了間際の1913年2月、革命期の情勢不安の真っ只中にあるメキシコで、『悲劇の十日間 (Decena Trágica)』とよばれる軍事クーデターが起きました。その際、かねてから親交があったフランシスコ・マデロ大統領夫人、両親、兄弟そしてその他関係者を、堀口は公使館に庇護し命を守ったのです。堀口は在メキシコ日本人コミュニティの協力を得ながら、公使館に逃げ込んだ大統領一家を保護するという英雄的行為を果たすと同時に、両国の外交関係に影響が出ぬよう、非常にデリケートなこの状況を巧みに切り抜けたのです。この経緯から、1934年、メキシコで最も権威ある勲章であるアギラ・アステカ勲章を受勲しています。

□文化・学術・青年交流の拡大：文化面に目を移してみましょう。「日墨文化協定」が発効した1955年、東京と大阪で「メキシコ大美術展」という展覧会がひらかれました。これは、メキシコ美術を主題として日本で開催された展覧会のなかで今日まで最も大規模でかつ意義深いものとされています。この展覧会を機に、メキシコ美術や文化に対する興味が日本人芸術家たちの間にわかに湧き上がり、多くの才能がメキシコを目指し海を渡ることとなったのです。この萌芽が後に、文学、絵画、彫刻、考古学、人類学、歴史、建築、演劇、音楽、写真、映画など様々な分野において今日まで続く両国の豊かな文化芸術交流として花開いていったのです。また、未来を担う学生や研究者たちによる学術交流も見逃せないトピックです。1971年、「日墨研修生・学生交流協定」が締結されました。これは71年当時、日本が外国と初めて結んだ交流計画であり、開始から約50年ものあいだ、何千にもものぼる学生と研究者たちが多くに語らい学んでいます。そして、昨年11月に広島で開催された第3回日本メキシコ学長会議に代表されるように、大学間の協力協定も今日ますます盛んであり、今後その学術的成果が大いに期待されるどころです。

□日墨 EPA が開く新次元：経済関係について言及すると、2005年に発効した日墨経済連携協定（日墨 EPA）により、両国間の貿易と経済的繋がりは更に緊密なものとなりました。メキシコにとって日本はアジア諸国として初の連携協定締結国であり、日本としてはシンガポールに次ぐ2番目の自由貿易協定締結が我が国であったことは、本稿の文脈からも特筆に値するでしょう。同協定は、日本側にとってデリケートな分野である農産物品を含んでいる点等で最初の本格的な自由貿易協定として注目を集めましたが、締結から13年経った現在まで得られた成果は満足できるものであり、これは輸出入や投資額の数字に如実にあらわれています。また、メキシコに進出した日系企業の数は今まで約1,200社に及び、その経済的インパクトは顕著で、雇用創出、地域発展、貿易バランス、技術協力や働き方改革など多方面にポジティブな影響をもたらしています。メキシコはラテンアメリカ諸国のなかで日本の最大の経済パートナーであり、反対に日本はメキシコにとって世界第3位の貿易パートナーであることは様々な要因に起因していますが、同協定が大きな契機となったことは明らかであります。

□双方向の人道支援：我が国と日本の長きに亘る結束は強く、どちらかが苦しみの中にいるときには手を差し伸べ互いに助け合ってきました。例えば、両国は環太平洋造山帯にかかっており地震大国といえますが、日本では1923年そして2011年の大震災、メキシコでは1985年と2017年に大地震が起っています。1923年の大震災ではメキシコが日本に援助を行い、昨年2017年の地震災害の際には、日本の救助隊が真っ先にメキシコへと駆けつけてくださいました。

また、この文脈においてメキシコと日本の防災、地学、地震学、火山学などの自然災害分野における科学・学術交流の成果は目覚ましいものがあります。日墨外交樹立100周年の記念の年に設立されたメキシコ国立防災センターは同分野の研究に大変な貢献を果たしています。

多様な交流の深化拡大に期待

日本とメキシコは、要所要所で政治的利害を同じくし、また経済的補完性に基礎を置きつつも時代とともにその関係を深化させていきました。活発な政治対話も行われており、1972年から今日まで就任したすべてのメキシコ大統領が日本を訪れており、そして8名の日本首相がメキシコを訪問しています。

また同様に、歴史的経緯のなかで自然発生していった繋がりが、産官学を挙げた制度的連携だけでなく、民間や個人レベルの交流を通じて強化されていきました。公共部門、生産製造部門、学術部門などさまざまな分野で協力関係が築かれていますが、それと並行して、互いへの興味や友好はポップカルチャー、スポーツ交流にまで広がり、地方自治体や在留コミュニティ、そして市民団体といったセクターからも様々な交流促進がなされています。

上述のような多様性に溢れる強固な基盤のうえに我々両国の絆そしてその未来が築かれていくのです。二カ国間の絆はもちろんのこと、多国間・地域間関係が介入するさまざまな国際的なシーンにおいても、日墨両国が互いの信頼に足るプレゼンスや理解を得るといえるのは非常に重要であり、両国の実りある輝かしい未来への道程において得がたい役割を果たしあっていくでしょう。（翻訳：駐日メキシコ大使館文化部）

メキシコ 35 か所目の世界遺産 テワカン-クイカトラン溪谷

メキシコ観光(メキシコ) 出納孝介



メキシコは中南米で最も多くの世界遺産がある国である。2017年までに登録された世界遺産は34か所。内訳は文化遺産が27か所、自然遺産が6か所、複合遺産が1か所となっていた。だが今年2018年7月、新たなメキシコの世界遺産が登録された。この新しい世界遺産は分類ではメキシコで2つ目の世界複合遺産となる。複合遺産とは「文化遺産」「自然遺産」の登録基準の内、少なくとも1項目づつ以上が適用された遺産で、自然環境と人間の文化というカテゴリーの中で共に謙虚な普遍的価値を持っていると認定されたという事ができる。

かくして35個目のメキシコ世界遺産は、「テワカン-クイカトラン溪谷 Valle de Tehuacán-Cuicatlán」という1,450 km²の広大な敷地面積を持つ自然保護区になっている。プエブラ州とオアハカ州の間に位置しており、「歴史が凝縮した土地」とか「メソアメリカの固有種生息地」とも呼ばれている。この呼称

の通り、この土地では大きく分けて3つの驚きを発見することができるだろう。

驚き1：2700年前の定住以前の生活跡

1つ目はこの土地で生活していた人の歩みを感じることができる点である。はるか昔、その土地にいた狩猟民の生活から主に採取により生活をしてきた人たち、約2700年前の定住民たちの住居や水路、ダム、または洞窟壁画や古墳などが発見されており、当時の人たちが食していたであろうカボチャやトウガラシなどの残骸、コクスカトランという洞窟では現在までに発見された中で最も古いトウモロコシの残骸が発見されている。

新たな世界遺産では様々な年代の生活や起源を感じることができる21か所もの重要な考古学的価値を持つ場所が保存されている。

驚き2：固有植物300種と鳥類140種

2つ目はこの自然保護区の種の多さである。メキシコで見ることができる10%ほどに相当する2700種の植物が自生しており、その内の300種はこの自然保護区でしか見ることができない固有の種となっている。

植物だけではなく絶滅のおそれのあるゴールデンイーグルなどが生息しており、鳥類だけでも約140種ほどいると発表されている。

メキシコでは代表的な植物であるサボテンの種類も多く、保護区内では高さ3mを超えるジャイアントサボテンの聖域があり、外国人が一番最初に思い描くメキシコの風景と共に、訪れた人たちに驚きと感動を与えてくれるだろう。

驚き3：恐竜の足跡化石—3億年前の浅瀬

3つ目は化石である。溪谷には3億年前に浅瀬の海だった場所（現在は標高1,600m）があり、はるか昔にメキシコ湾と太平洋が繋がっていた場所である。

そこでは白亜紀時代の貝やサンゴ、そして恐竜の足

跡の化石を見ることができるのである。恐竜の足跡はかなりくっきりと残っており、初めて訪れる方々には一番インパクトが強くわかりやすいと思われる。



現地ツアーも行われており、日本では考えられないが恐竜の足跡に自分の足を重ね、大きさの比較をすることができる。

←恐竜の足跡

秘訣：早めの訪問をお勧め

2018年7月に発表されたばかりのこの新しい世界遺産だが、メキシコシティから日帰りでは少し厳しく、1泊2日で余裕をもって訪れるのが良いだろう。

過去を振り返ってみると、他の世界遺産のように有名になった後から少しづつ観光地化が進み、規則も強まり、また自由に見学できる箇所にも制限がかかってくると考えられる。登録されたばかりの今のうちが、一番自由に多くの場所を見学できるだろう。<了>

【編集部注：テワカン-クイカトラン溪谷の詳細は UNESCO のウェブ：<https://whc.unesco.org/en/list/1534>を、メキシコの世界遺産35カ所一覧は同じく UNESCO のウェブ：<https://whc.unesco.org/en/statesparties/mx>を参照のこと】

メキシコ料理へのアプローチ

メキシコ料理店 La Casita
オーナーシェフ 渡辺庸生

日本におけるメキシコ料理のパイオニア La Casita(ラ・カシータ)のオーナーシェフ渡辺庸生さんに、ユネスコ食の世界遺産に指定された多様なメキシコ料理文化の真髄を縦横無尽に語っていただきます。どのようなお話しが飛び出すか毎号のお楽しみです。La Casita の HP:<http://www.lacasita.co.jp/menu/sugerencia/index.html> (編集部)

第6章 Fiesta Mexicana@お台場でホンモノのメキシカン

メキシコの魅力を提供する催し、「Fiesta Mexicana」がスタートしたのは1999年9月のことだった。場所はお台場ウェスト・プロムナード。太陽広場では民族ダンスやマリアッチ、ムシカ・ランチェラ、ロマンティコなどのメキシコを象徴する歌が披露され、市場通りには民芸品や衣装、雑貨の店が軒を連ね、在日メキシコ人会や既存のメキシコ料理店がタコス等、軽食の屋台を並べる盛大なイベントである。主催の実行委員会には歌手のマリキータ(帆足まり子)、織家律子(Café y Arte)、石井あけみ(メキシコ観光代表)、畠野さん(タコス・デル・アミーゴ、オーナー)の4人の女傑が揃っていた。実力者の彼女達はメキシコ大使館の後援を得て、メキシコ外務省、農水省 SAGARPA、観光局、商務部を動かし、この企画をこれまでに無い充実した行事に膨らませた流石である。ただ調理に関してはやはり TEX-MEX が幅を利かせているのが現状だった。唯一、メキシコ人たちの店のサルサやタコスの具材の美味しさが際立っていたが、たった一軒では伝わるものも伝わらない。すぐ側のホテル、グランパシフィックの料理部から連絡が入ったのは次の年の初夏の頃だった。前年の集客力を目の当たりにして、ホテル内でもメキシカンを出したいので実行委員会に相談したところ、「レクチャーを受けるなら代官山ラ・カシータが一番」と言われましたとの事。

勉強会が始まった。まずは一般の調理師達が認識し

第7章 『食の文化話題辞典』

1978年2月末、代官山旧山手通りにオープンした翌年、左隣にハリウッド・ランチマーケットが開業された。これまでのファッションの常識を覆す古着のお洒落は、若者達の絶大な支持を得てファンは急増し、ビンテージの品を求めて連日賑わいを見せていた。その品々は正に戦後の憧れであったアメリカの歴史に裏打ちされた本物の価値観を知らしめていた。ボスの源さんが店に共感してくれたのは、本国の食文化を真摯に伝えようとする私の姿勢だった。幾千年もの時を経て育まれた先住民の独創性あふれる食の歩みは、現在も受け継がれているが、当時はだれも知るどころでは無かった。メキシコの食材や調理法に関する認識を全く誤って記述している著書が多く、取材に訪れるライター達を叱りつける私の姿を何度となく見掛けた・・・と後に源さんは語ってくれた。自分自身に記憶は殆ど無いが、この頃の「東京うまいもの屋」や「東京食べ歩き」等、飲食ガイドブックを読み返してみると、熱心に、強い口調で、憤慨などの言葉が織り込まれているから、きっとそうだったのだろう。恵まれたことに年間100近くもあった週刊誌、月刊誌、新聞、単行本、

ているスパイスを多用したメキシカンが米国のものである話から始め、本国における食の実態、歴史、地域性等、店の献立を食して貰いながら説いていた。数品、レストランのメニューに加えたい要望だったのでアラカルトを選び、トルティージャは実践が無いと無理なので外すこととした。後に取締役、総料理長まで出世した当時の料飲課長(矢部喜美夫)をリーダーとする部下10人に教えたのは唐辛子の使い分けである。簡単なレシピで調理出来るサルサ2種類を使って、塩で調味した白身魚や鶏肉(笹身)に添える皿と、単品で個性を発揮するチレ・パスイージャを海老と茸に絡めたオイルソースの pasta を伝授した。開催期間中、品々の評価は上々だったらしく、後日、現場に出向くと厨房全員から歓喜の声で迎えられた。探求心が芽生えたのか、それから2年間、夏前になると彼等へのレクチャーは回を重ね、親交は深まっていた。メキシコに育まれた唐辛子類の持味には、新たな創作料理への可能性が溢れている。奇をてらうこと無く食材の個性を見抜いて挑戦することで美味しい一品が生まれてくると信じている。私をホテルに推薦してくれた女傑達も現在は石井さんを除いて3人が旅立ってしまった。ご冥福をお祈りすると共に合掌！



にホンモノのメキシカン

ラジオ、TV等の来訪の度、ここぞのチャンスとばかりに捉えて対応したのだと思う。嬉しい企画が無い込んだのは1993年の春だった。

「今度、世界を網羅した食の辞典を作りたいの、原稿、お願い！詳細は会ってからね」といつもの調子で連絡をしてきた電話の主は杉野ヒロコ氏、業界の名だたる料理ディレクターであり、ラ・カシータの創設期からいち早く味の名店として取り上げてくれたグルメライターでもある。2年掛けてフランス各地の一流レストランを取材、その敏腕さと文の構成力には定評があり、大ホテルの総料理長、日本食の板長、フレンチ、中華、イタリア、エスニック等、著名なスーパーシェフ達が彼女には絶大な信頼を置いていたので、執筆者の名簿にはすごい方々が名を連ねていた。メディアが挙(こぞ)って料理番組制作や特集記事に乗り出す時代より4年も前の話である。敏感に未来を読み切った彼女の行動力の枠に加えて貰えた事実は光栄の至りだった。使命感が頭を持ち上げて来た、原稿の字数は、一章1800字×10。食材や伝統料理の歴史的背景、国民食の体系的区分け、郷土料理における地域色、海

鮮、淡水魚の妙味、調理の比較分類、主食の来歴など、書きたい首題は山ほどあった。原書から検証を取らなければならぬ部分が多々あり、時間を必要としたが約4か月かけて書き終えた。後日、手渡した原稿はか

第8章 「デパ地下」でのイベント販売に参加

それまでフランス料理一辺倒だった洋食の領域に頭角を現し、瞬く間に料理界を席卷したイタリアンの台頭によって、1990年代は空前のグルメブームが全国を駆け抜けていた。TV各局は挙（こぞ）って番組を編成し、各出版社は既存の雑誌の特集だけに留まらず、新たに専門誌を刊行する社が増えていった。

ラ・カシータも御多分に漏れず取材が相次ぎ、毎月のように、場所は池袋の東武百貨店催し会場だと勧誘。条件は現場でのイートインとテイクアウト、10種類以上の代表料理だった。果たして持ち帰りでも未知の味が顧客に通用するのか一抹の不安があり躊躇していると、後日お伺いしますと電話は切れた。試食に訪れたフードコーディネーターたちは店の味に太鼓判を捺し、是非にと推されると悪い気はしなかった。決断のきっかけは日高さん。現在でも有名な大シェフだが、当時絶頂の方である。比較啓蒙の絶好の機会であった。メニューの絞り込みに着手する中で、冷めても味や食感が劣化しないものと簡単に温められる献立を選んだ。

当日、池袋駅には二人の顔写真入りの大きなポスターがあちこちに掲げられていて少々照れくさかったが、名誉なことだと心して会場入りした。朝8時の朝礼に始まり10時の開店までの準備に期待は膨らんだ。タコス類はイートインのみに限定して、低温にしたガラス張りのケースの中には若鶏のモーレソースとランチェラソース、豚ロース肉の田舎風、ソーセージ入りのメキシカンスクランブルエッグ（ハラペーニョ風味）、メ

なり満足のゆくものだったようで満面の笑みで握手を求められた。「食の文化話題辞典」とタイトルが付き、秋に刊行された500ページに及ぶ分厚い辞典は、おそらく世界初である。

キシカンライス等を並べてみた。現場は大多数を占める奥様族を中心に数百人単位の人々がのべつ幕無し訪れてくる。初めて目にする品々に質問の嵐である。「どんな味？、カレーみたいなの？」丁寧に説明すると興味が沸いたのか購入される方々が段々増えていった。焼き立てのトルティージャに熱々の具材を置き、フレッシュなサルサで食するタコスには感嘆の声があがっていた。こちらは若者が多かった、年配者には手掴みで食べることに抵抗があったのかも知れない。



夜、8時の終了までの初日に掴んだ手応えはそれから一週間上昇気流に乗り、無事、楽日を迎えた。バブル崩壊の影響で店がそこま

で忙しく無かった状況も幸いしてイベントに専念出来た事が好結果に繋がった。同業の情報網は耳聡（ざと）く、評判をリサーチしたのかその3ヵ月後、新宿高島屋から出店のお誘いがあり、今度はタコスだけを売った。最後は銀座三越からの依頼だった。昨今流行りのデパ地下での販売は非常に有意義だった。96年一年間の光栄な出来事である。（連載第2回完）

お知らせ

幹事会の人事異動

メキシコ・日本アミーゴ会の幹事会人事につき2018年9月10日の幹事会において、下記の通り確認されました。

1.会長の交代（再掲）

上原尚剛現会長から河嶋正之新会長（現・会長代行）への交代は2019年3月9日開催予定の次期総会において報告のうえ確定する。

2.幹事の退任（新規）

鴻巣勝明さんは8月8日付で幹事・副会長を退任されました。西日本地区代表だった鹿内竣一さんは9月10日付で幹事・副会長を退任されました（注：西日本代表の後任は市井勇人新幹事「7月号」で本項既報）。岩崎 准さんは9月10日付で幹事を退任され同時に退会されました。お三方の永年のご尽力に改めてお礼を申し上げ、引き続いてのご支援を重ねてお願い申し上げます。

3.新幹事の就任（再掲）

吉野 隆さんと市井勇人さんが次期総会での承認を経て新しくアミーゴ会幹事に就任します。

以上

お知らせ

2018年メキシコ歴史文化講演会

『日墨修好130周年記念講演会』

時間：18:00～20:00（開場17:30）

会場：メキシコ大使館別館5階

詳細：<http://www.mex-jpn-amigo.org/>

第1回9月6日（終了）「メキシコと日本の交流の歴史と変遷」講師：アルマダ駐日メキシコ大使

第2回10月1日「日本とメキシコ：日墨友好130年の歩み」講師：柳沼幸一郎さん（神田外語大教授）

第3回11月9日「メキシコと国際貿易～日米との関係を中心に～」講師：所 康弘さん（日墨交流会会長／明治大学准教授）

第4回12月4日「日墨文化交流のパイオニア～北川民次と佐野碩～」講師：山本厚子さん（ノンフィクション作家、元東京農業大学・早稲田大学講師）

あとがき：12月1日のメキシコ新政権発足&11月の米中間選挙を前にNAFTA再交渉は制限時間一杯。事業環境が見通せる決着の早いことを期待。台風の影響でFiesta Mexicana大阪は急遽中止。しかしアミーゴ会西日本の懇親会は盛況に開催され編集部も代表参加。Fiesta Mexicana東京は一週間後賑々しく開催。アミーゴ会主催メキシコ歴史文化講演会も好評開催中!! 会員の皆様もお誘いあわせてご出席ください。【20180930か】